

John LOCKE の体育思想について

— 近代体育思想史研究の一小節として —

坂入 明

Thought of Physical Education of John Locke

— A Historical Study of the Thought of modern Physical Education —

Akira SAKAIRI

In this treatise, the author intended to make clear a distinctive feature of the thought of physical education of J. Locke in “Some Thoughts concerning Education” which was published in 1693.

And so, the author found some remarkable opinions as follows:

- (1) new educational bodily view
- (2) excellent physical educational thought of disciplinarianism considering habit and “Principle of Nature”
- (3) recreational theory which is based by physical activity

Next, the author tried to compare with physical educational thoughts between Locke and Rousseau in “Émiel ou de l'éducation” which was published in 1762. As a result of this trial, the author found that two thoughts have obviously coincidence in bodily view and disciplinarianism.

Therefore, the author can say that Locke's thought is an unique one about physical education, and it has an important influence to Rousseau's thought. Indeed, it would be the leading thought on modern history of physical education.

はじめに

われわれは今日、体育を教育活動に必要不可欠の一領域として位置づけ、その実践を最も普通のあるいは正常なすがたとして理解している。しかし、ここに至るまでには西欧のルネッサンスに起源を有する体育思想の変容が必要であった。つまり、一般的には肉体や肉体の快楽を肯定する考え方がその中に生み出されてきたことは周知のことである。教育思想の面においても、ヒューマニズムの見地から、子どもの全面発達が叫ばれ、従来の単なる精神の教育から身体へと教育思想の拡大が主張されるようになった。また、近代的な体育思想が形成されるためには、モンテーニュの「エッセー」(M. Montaigne, Les Essais, 1580) やルソーの「エミール」(J. J. Rousseau, Émiel ou de l'éducation, 1762) などにみられる体育思想を経て、近代体育の始祖といわれる「青少年の体育」の著者グーツムーツ (J. F. C. GutsMuths, Gymnastik für die Jugend, 1793) による

シュネッペンタールの汎愛学校での教育的体育の実践が必要であった。

本小論は、こうした史的流れを踏まえ、ルソーの「エミール」にみられる教育思想に重大な影響を与え、その思想的先駆者といわれるジョン・ロックの「教育に関する若干の考察」(John Locke, *Some thoughts concerning Education*, 1692) を取り上げることにする。その場合、このすぐれた「教育論」(以下「教育に関する若干の考察」を「教育論」と略記する)の中で、特に鍛練主義教育思想を通して、その教育論構成の基底となっていると考えられるロックの体育論について分析を行ない、考察することにする。そして最後に、ルソーの体育思想との若干の比較、考察を試みることによって、ロックの体育思想の有する史的意義を究明してみようとするものである。

1. ロックの「教育論」にみられる体育観

イギリス市民革命の激動期に生き、1689年の“名誉革命”の思想的跡付けを行なったといわれるロックは、主著「人間知性論」(*An Essay concerning Human Understanding*, 1692)や「政府二論」(*Two Treatises of Government*, 1690)等によって、近代市民社会の思想原理を追求した思想家として位置づけることができよう。また、イギリス経験主義哲学の祖といわれる彼は、生得観念を否定し、精神白紙説を唱え、後天的な教育作用に全幅の信頼を寄せて、「われわれが出会う人々の良いか悪いが、有用な人かそうでないかは、十中八九彼らの受けた教育の力に負っている¹⁾」と述べている。また、彼は教育論のなかで子どもを「ただ白紙か、思うように形を変えることのできる密蠟²⁾」として考えている。このようにいわば教育楽観論ともいべき立場をとるロックの「教育論」とはいかなるものであろうか。

「教育論」はロックが1683—1689年の間、祖国イギリスを離れて、オランダに亡命している時に、友人クラーク (Eduward Clark) の子息の教育のためにクラークに宛てた書簡であった。初めは出版を目したのではなく、後に知人の強い要請もあって、それらの書簡にほとんど変更を加えず「順序を変えた程度³⁾」でロックは出版を決心したのである。それゆえ、同時代の教育思想家コメニウスの「大教授学」(*Y. A. Comenius, Didactica Magna*, 1657)などと比較すると、形式的にも、内容的にも脈絡がなく、体系だった教育書と考えることはできない。したがって、われわれにとってこの私的な紳士教育の書から、ロックの教育思想を整理し、明確に把握するには困難を要するものと思われる。

さて、ロックは「教育論」の冒頭に、「健全な身体に宿る健全な精神」(*Mens sana in corpore sano*)という、ローマ時代のユベナーリス (D. J. Juvenalis) の言葉を引用しながら、まず身体についての教育から考察を開始している。そこでは健康養生論を中心とする具体的で細かな体育論を展開している。それから、彼は「良い躰、世間の知識、徳、勤勉、信望をいくら付与しても与えすぎることはない⁴⁾」と述べながら、徳 (Virtue)、分別 (Wisdom)、躰 (Breeding)、知識 (Learning) の四つを精神教育の重要な項目として提示している⁵⁾。すなわち、ロックは体育、徳育、知育の調和的教育を考えていたと思われる。このことは「教育論」の構成、つまり、全216章は体育について1—30章、徳育31—146章、知育147—215章、そして216章は結論と、およそ三つに大別できることから考えても理解できるのではなからうか⁶⁾。しかし、なんといってもロックの究極の目的は、確立されつつある近代市民社会の担い手として活躍すべき、ブルジョワ階級の子弟を「それぞれの持ち場で有徳で役に立つ有能な実務家⁷⁾」に仕立てあげることであった。この実務家 (Man of Business) の備うべき要素は、彼が「徳こそ、一人の人間あるいは紳士が授けられるべき第一で、最も必要な資質と確信する⁸⁾」と述べているところからも理解できるように、人間形成のなかでも徳育をその中心に据えていたのである。したがって、このように考える時、ロックの「教育

論」は身体の教育をその基礎部分とし、それに教育の中で「最も小さく、主な仕事でない⁹⁾」知育を施し、究極的には徳育によって陶冶するといった構造を有していると考えられることができる。

ところで、ロックは有徳な実務人の形成をどのように考えていたのであろうか。すなわち、彼は「あらゆる徳性と価値の最大の原理と基礎は、人間が自己の欲望を否定し、自己の性向に抗し、また欲望が他方へ傾いても、理性が最善として示すところに純粹に従うことができることである¹⁰⁾」と端的に述べている。この言葉にはロックの教育理念があますところなく表明されていると考えられる。つまり、揺籃の時代から溺愛や甘やかしを廃して、むしろ積極的に「時々計画的に苦痛に耐えることに慣らす¹¹⁾」ように訓練することによって、自己統制力を有する理性的人間を育成しようと考えたのである。これは「不屈の精神は諸徳の番人であり、支持者である¹²⁾」と考えるロックの倫理観から考えても当然のことと思われる。ロックはこのように怪我とか病氣、不安や恐怖といった肉体的、精神的なさまざまな困難、苦痛に人間を慣らし、欲望に対しても理性の支配下におこうと考えているのである。このようなロックの鍛練主義の教育方法に対して、教育史家モンロー (P. Monroe) が「鍛練主義教育の代表者¹³⁾」として評価していることはまことに当を得たものといえよう。この鍛練主義の教育思想こそ、ロックの教育原理の重要な柱となっているのである。しかし、この場合見過ごされてならないことは、子どもに対する強制的な単なる厳格主義を意味するものではなく、子どもを十分研究して「子どもに本来備わっている自然性¹⁴⁾」をロックが尊重している点である。また、ロックが幼少からの漸次的な習慣形成によって無理なく「習慣が理性の代用を行なう¹⁵⁾」というような方法を講じながら、「気まぐれの欲求と自然の欲求¹⁶⁾」とを峻別するなどの配慮を怠っていない点である。このことは、子どもの自由や欲求を単におさえるだけでなく、ロックが「一方で子どもの精神を気楽で活発で自由にさせておきながら、他方で子どもが心をひかれてしまう多くのことから遠ざけておき、子どもにとって困難な道徳的ことがらへと指導する¹⁷⁾」と述べているところからも理解できる。このようにロックは教育上単なる厳格主義を表明しているのではなく、一方できちんと教育的配慮を設置している。それゆえ、ロックは子どもの教育途上で遭遇する自由と規律といったような二律背反の「一見矛盾するように見えるものごとの調整ができる人こそ、教育の真の秘訣を心得ている人である¹⁸⁾」と述べているのである。

一方、上述したような徳性涵養における鍛練主義の教育方法は、ロックの体育論においてもその基調となるものである。このことはロックが「子どもの身体というものはだいにされたり、甘やかされたりすることによって台なしになったり、すくなくとも損われる¹⁹⁾」ものと考え、それゆえ、紳士階級の子どものいえども「実直な小作農や富裕な自作農がするようなやり方²⁰⁾」で「精神も身体も同じように、自らの性向を抑え、困苦で身体を訓練する習慣によって、旺盛で落着きをもったものとしなければならない²¹⁾」と述べているところからもロックが体育上鍛練主義を重視していることが窺えるのである。このように子どもの教育にあたって、ロックは健康な身体の形成はもとより、さらに困難や労苦に耐えられる強靱な身体の形成を主張しているのである。これはロックが体育について考える場合においても、有徳人形成にみられる鍛練主義教育思想を駆使して、こころとからだを一体とする教育、すなわち、教育上心身を相補関係に結ぶ体育思想を展開していると理解することができるのである。したがって、ロックは「教育論」を述べるにあたって、まず最初に身体や健康について考察し、「健全な身体に健全な精神が宿るということは、この世における幸福な状態というものを簡単にではあるが適切にいいあらわしている。この両者を兼備する人間はこれ以上他に望むことはない。またどちらかを欠いている人間は他の何物を得たとしても及びようもない²²⁾」と述べて、身体や健康の問題こそ人間や教育について考える場合、決して無視できない重要なこと

がらであると考えていたのである。

これを要するに、ロックの「教育論」の中にわれわれは、特に鍛練主義という考え方を通して、身体の訓練を教育作用へ導入し、心身を全面的に教育するという近代教育思想の重要な原則の存在を認めることができるのである。また、このように体育を明確に教育の基底として位置づけたことはロックの体育論のきわめて注目すべき事実と考えることができるのではなからうか。以下このように位置づけられるロックの体育論について若干分析を試みてみよう。

2. ロックの体育思想

前節において考察したように、ロックの体育論は子どもの教育作用の中で身体的側面のみならず、同時に教育の目的である有徳人形成の主要な役割を演ずる徳育論的な機能を帯びながら、人間形成の一翼を担うものとして、ロックの「教育論」に位置づけられていることをわれわれは理解した。ここではロックの体育論の具体的論述にしたがって、身体観や鍛練主義体育観、そして「教育論」の末尾に述べられている彼のレクレーション論などを中心として、ロックの体育思想について整理してみよう。

(1) 身体観

ロックの「教育論」のねらい、すなわち、理想の人間像は市民革命を経て次第に社会的勢力を蓄えてきたブルジョワ階級の子弟を、来るべき商業社会に伍していくことのできる有力な実務人に形成することであった。そのためにはまずなによりも健康と強靱な身体を基礎として具備していなければならないとロックは考えている。そこでロックは「われわれの職務や幸福のために健康がどれほど必要であるか、また世に秀出しようとする人にとって困難や疲労に耐えることのできる強靱な身体が不可欠なものであるかは証明の余地もないほど明白なことである²³⁾」と述べている。このように人間の精神的側面と同時に身体的側面をも重要視するロックは、彼の「教育論」を展開するにあたって、「われわれの主要な関心は精神 (the Inside) に向けられるべきであるが、かといって身体 (the clay Cottage) を抜きにすることはできない²⁴⁾」と考え、ロックは端的に心身一体の調和のとれた教育の必要を強く主張しているのである。したがって、健康で強靱な身体の形成こそは、子どもの教育の第一歩であり、同時に徳性涵養の鍛練主義教育思想の基礎でもあった。まさにロックの体育論は忍耐、節制などを養う点からみると徳育そのものといっても過言ではないのである。ロックが子どもの教育にあたってこのように身体に注目しているのは、彼がオックスフォードで医学を研究したすぐれた医学者であることや彼が生来の病弱に悩まされたこともその理由としてあげられよう。さらに、経験論に依拠するロックは「人間知性論」の主題である「感覚と観念との間の結合²⁵⁾」を試みるにあたって、身体を無視したり軽視することはもはや不可能であったのではないかと思われる。このようなロックの斬新な身体観は、実に従来の中世的で、身体を蔑視する偏頗な単なる精神教育を改革し、身体を教育を加えることによって教育思想の拡大を促す源動力となったのである。

また、ロックは周知のように生得観念を否定し、精神白紙説を表明しているのであるが、身体については白紙というよりは明らかに生得性を認めていたと思われる。ロックは「身体をかたちづけている自然を損ねないように注意するべきである²⁶⁾」と考え、われわれの身体が本来所有している「自然の法則」を破壊しない限りでの鍛練主義体育思想を強く訴えているのである。それゆえ、ロックは、われわれの身体は外部からさまざまな人為を加える「人間の手に委ねるよりは、全く自然にまかせることのほうが安全である²⁷⁾」と主張している。ここから、われわれはロックの鍛練主義体育論が、身体の原理として「自然の法則」をその重要なよりどころとしているのであると考え

ることができる。このような自然主義教育思想の萌芽を隠すロックの体育論にみられる身体観は、後のルソーの自然主義体育思想へと影響し、発展するものであると推測することは不可能であろうか。

要するに、上述したように心身を統一的に把握し、「教育論」の中に明確に位置づけられたロックの身体観及び体育観は、明らかにルネッサンス以来の新しい人間観や教育思想の流れの上に位置するものであって、その“自然の法則”を身体の原理とする身体観は、ルソーの自然主義体育思想の萌芽を宿すものといえよう。

(2) 鍛練主義体育観

ロックは彼の「教育論」の中で“自然の法則”の範囲内で鍛練主義の身体教育を基調としながら身体を重視し、健康で強靱な身体を具備する人間の形成を目的として彼の論を展開している。そのためにロックは、医者が病人や病弱な子どもを取扱うような方法ではなく、むしろ積極的に健康や体質の改善、向上を図る身体の教育について考察している。すなわち、甘やかしや溺愛によって子どもを柔弱にするといった育て方でなく、「実直な小作農や富裕な自作農のやり方²⁸⁾」にみられるような鍛練主義の方法を彼の体育論の大きな柱としているのである。ロックは冬であろうが、夏であろうが冷水で子どものからだを洗ったり、服装についても「あまり暖かすぎるほど衣服を着せたり、窮屈にくるんでしまっはいけない²⁹⁾」と述べている。むしろ、子どもは薄着でゆったりとした衣服を着せ、「冬でも戸外に多く出して火のそばなどに近づけないほうがよい。このようにして子どもは暑さ、寒さそして太陽や雨にさらされることに慣れて耐えることができるようになる³⁰⁾」と考えて、古代人の例を示しながらロックは述べている。このようにロックは鍛練主義の具体例を示しながら、子どもは「これらのことがらに耐えられなければ社会に出てほとんど役に立たないだろう³¹⁾」と考えているのである。さらに、ロックは食事についてもあっさりした質素なものを適度に与えるように勤めている。その場合、自然の要求以上に食べたり、「自然の渇き以上に飲まないようにすることは、健康にも節制のためにも都合のよいことである³²⁾」と考え、節制や克己心の養成を強調している。子どもの睡眠については早起早寝の習慣をつけることに注意すれば、十分な睡眠こそ子どもの健康や成長発達によいと考え、「睡眠こそ自然の偉大な強性剤である³³⁾」と述べている。しかしこの場合、ベットは羽根布団よりは堅いベットを用いることを勧めている。なぜなら、「堅いベットに寝ると身体の諸部分を強くするが、毎晩羽根布団にうずまって寝るとしばしば病弱や早死の原因となる³⁴⁾」と彼が考えていたからである。排泄について特別な研究をしていた³⁵⁾ロックは、かなりのスペースを割いて詳細に論じているが、結局習慣による規則正しい便通を強調している。身体や健康に関して具体的な彼の見解を述べた後で、ロックはすぐれた医者でありながら、医者や医術に対して痛烈な批判を溶びせている。子どもの弱い体質にはできるだけ人為を加えず、自然の治癒作用に任せ、子どもにその困難に耐える力を養うことを考えている。それゆえ、医薬も医者も与えないことを勧め、ロックが述べているように「私の理論と経験の両方から考えても子どもの弱い体質にはできるだけ人為を加えず、絶対に必要な場合だけしか手を下さない³⁶⁾」と考えることがロックの信念であった。

ロックの非常に厳しい鍛練主義体育思想は、すでに考察した「教育論」の場合の鍛練主義と基調を同じくするものであるが、ここで再びわれわれは、ロックが単なる厳格主義の体育思想を表明しているのではないことに、特に注意をしなければならない。ロックは子どもの本来所有している自然性を体育上尊重し、「自然が最善と考えているように身体の形成を自然の法則にまかせなさい。そうすれば自然はわれわれが行なうよりずっと、正確になしとげるものである³⁷⁾」と考えて、彼は

子どもの身体の自然な成長発達に合致する鍛練主義の方法を強く求めているのである。また、早期からの習慣を重んじて、わたしたちの身体は除々に注意しながら「子どものころから慣らしてしまえば、身体というものは不可能と思われることさえ可能にすることができる³⁹⁾」ものであるとロックは述べている。

ロックの体育論の内容は、彼が体育論の最後に要約して「戸外の十分な空気、運動と睡眠、あっさりした食事、ワインや強いアルコールを飲まないこと。衣服は暖かすぎず、窮屈でないこと。特に、頭と足を冷やし、足はしばしば冷水に慣らし、洗ってやること³⁹⁾」と述べているところからも理解できるように、略言すれば、前近代的な健康養生論をすぐれた鍛練主義思想で統一したものであると考えることが可能であろう。しかしその場合、われわれは一方でロックが“自然の法則”に従う自然主義の体育方法や早期からの漸次的な習慣形成などの諸方法を用いることによって、「子どもの気質や体力や体質を考慮する⁴⁰⁾」教育的方法を熟慮している点に、ロックのすぐれた鍛練主義体育思想の著しい特徴を認めることができるであろう。

(3) レクリエーション論

ロックは「教育論」の終りに、子どもが勉学以外に練習によって身につけるべき大切なこととして、身だしなみ(Accomplishment)と手仕事(Trade)の二つをとりあげて、これらをレクリエーション(Recreation)の内容として考え、行なうことを強調している。まず身だしなみとしては、踊り方を習得するというよりは上品な身のこなしをつけるためのダンス、みだしなみのうちでも最後に考えてもよいとロックが述べている音楽、活発な身体活動によって健康に役だつ乗馬や剣術などを取りあげている。しかし、ロックは「剣術は健康によいが生命にとって危険な運動のように思われる。……だから剣術よりはレスリング(Wrestler)⁴¹⁾」を勧めている。このように市民社会にあっては、乗馬や剣術などは中世の封建社会における騎士の養成や軍事上の目的としてではなく、レクリエーションの一つとしてロックが価値を与えているところに、体育論的にみて特に注目できよう。一方、手仕事については練習によって得られる熟練した技術が趣味や実益に役だつとロックは考えて、絵画・手工・園芸・粘土細工・大工仕事などを指摘している。このようにレクリエーション教育をロックが強調しているのは、日常生活のなかで「われわれの心身にみられる弱点は、しばしばくつろぎのために休養しなければならぬことである。それゆえわれわれの生活のあらゆることを有効に用いようとするならば、われわれの生活のかなりの部分をレクリエーションに充てなければならぬ⁴²⁾」と彼が考えているからである。しかしその場合のレクリエーションは人から与えられたり、強制的なものではなく、自発的で楽しみや喜びをとまなうものでなくてはならない。それは個人の生活を充実させたり、余暇の善用となるものであり、流行のくだらぬ遊びや勝負ごとや暇つぶしでなく、われわれが「レクリエーションをやり終った時に、われわれの身体や精神の両方に満足感を残さない⁴³⁾」ようなものであってはならないとロックは考えているからである。そこでロックはレクリエーションが効果的なものとなるために、静的なものよりは戸外での適度な身体活動をとまなうものを勧め、「休養や元気回復を求めるなら、身体活動が必要であり、それは疲れた思考をゆったりさせ、健康や体力を回復させる⁴⁴⁾」ものであることが望ましいと述べている。それゆえ、ロックは「レクリエーションは実務に携わらない人や職業に疲労や倦怠を感じない人には関係がない。レクリエーションの時間はそれまで働いて疲労したからだやこころを休養させるようにして、喜びやくつろぎを得る以上に後のために何か有益なものを生じるようにしなければならない⁴⁵⁾」と述べている。このようなロックの斬新なレクリエーション論は、当時の教育思想の中でも他に類をみないユニークな見解であり、また紳士「教育論」としての面目をいかに発揮するものである。同時に

これはブルジョワ的レクリエーション論であったと考えることができよう。また、アメリカの体育学者ニクソン (E. W. Nixon), カズンズ (F. E. Cozens) が余暇活動の重要性を指摘して、レクリエーションを知的なもの、社会的なもの、芸術的なもの、身体的なものとして四つに分類し、その中の身体的レクリエーションとして「工作、狩猟、魚釣り、ハイキング、遠足、園芸、個人および団体運動競技等⁴⁶⁾」を取りあげているところから考えても、ロックのレクリエーション論が体育論的な意味を十分有していることが理解できるのである。

以上ロックの体育思想について考察してきたように、ロックの体育論は旧式健康養生論を中心とした前近代的な体育思想であるといえるかもしれない。しかし、そこにロックが表明しているすぐれた教育的な身体観や“自然の法則”や漸次的な習慣形成を重んじながら実施している鍛練主義体育思想、さらに、ユニークで近代的なレクリエーション論の主張は、明らかに古い健康養生論を克服して近代体育思想の形成過程に新機軸を提示した改革者としての位置を確立させるものである。このようなロックの体育思想の遺産は、今日のわれわれに正しくその評価を与えさせるに十分なものを有していると考えられるべきである。

3. ロックの体育思想の史的意義

われわれはこれまでロックの体育思想の特徴について、身体観や鍛練主義体育観そしてレクリエーション論と大きく三つに分けて理解してきた。ここではこのような特徴を有するロックの体育思想を、近代体育思想の発達過程の中で、特にルソーの体育思想との若干の比較考察を行なうことによって、ロックの体育思想の有する思想史的意義を明らかにしてみよう。

ロックのすぐれた鍛練主義体育観やその根底にある教育上心身を統一的に把握する身体観などは、ルネッサンス以来の新しい体育思想の流れの上に位置するものである。このようなロックの体育思想の萌芽はすでに、モンテーニュの体育思想の中にその若干の存在を認めることができるのである。すなわち、モンテーニュが「エッセ」の中で、「この主要な部分〔肉体と精神〕を別々に分け離そうとする人々は間違っている。反対にこの二つを結び合わせねばならない⁴⁷⁾」、われわれは「精神を鍛えるものでもなく、肉体を鍛えるものでもなく、人間を鍛えるのです。この二つを別々にしてはいけません⁴⁸⁾」と主張するモンテーニュの新しい身体観、体育観をロックは摂取しつつ自己の斬新な体育思想を形成したのであると考えることができる。ロックがこのようにして形成した体育思想は、ルソーの有徳な社会的自然人の形成を目的とした「エミール」にみられる体育思想⁴⁹⁾へと明らかに影響を及ぼしたのである。ルソーもロックと同様、当時の身体教育を等閑視する教育に対して、「身体を行使することが、精神の働きに有害であると考えるのは、実に哀れむべき誤謬である⁵⁰⁾」と批判を浴びせ、「身体を行使すればするほど、精神はますます光を放ってくる。彼の力と彼の理性とは同時に成長し、互いに助長しあう⁵¹⁾」教育をルソーは主張しているのである。結局ルソーは、子どもの教育に際して「私たちの知性の道具である手足や感官を訓練しなければならない。そして、これらの道具をできるだけ完全に利用するためには、それらを提供する身体が頑強で健康でなければならない。このように人間のもつ真の理性は身体から独立して形成されるものではなく、身体のすぐれた構造こそ、精神のいろいろの作用を容易にかつ確実にする⁵²⁾」と答え、このことを実現させるような教育的体育をルソーは考えていたのである。このように教育作用の中へ体育を機能的に位置づけているルソーの体育思想は、既述したロックの身体観や鍛練主義体育思想にみられる“自然の法則”に従う、自然主義体育思想から「エミール」の基調となる「自然の教育」(l'éducation naturel)を敷衍したと言っても過言ではないと思われる。

一方、鍛練主義体育思想においても全くといってよいほどルソーはロックを全面的に支持し、

「そのこと(子どもを鍛練する教育)については、一般に、ロックの書物に書かれてある以上には、すぐれた理由も道理にかなった法則もみつけないことができないから、ただロックの考察に私の若干の考察を加えた上で、あとは彼の書物を参照してもらうことにとどめたい⁵⁸⁾」と述べて、全てに渡って批判的傾向の強かったさすがのルソーも謙虚にロックに同意を示している。ルソーが「エミール」に求めたものは「運命の打撃に耐え、富貴も貧困も意に介せず必要とあらばアイスランドの氷の中でもマルタ島の焼けつくような岩の上でも生きてゆくことができる⁵⁴⁾」のような、彼の理想とする社会状態に生きる有徳人の形成であった。そして、ルソーが「美德には必ず闘いがともなう。『美德』という語は、『力』から来ている。力はあらゆる美德の根底だ⁵⁵⁾」、「忍耐と堅固さは、他の美德と同じように子ども時代に修業すべきことがら⁵⁶⁾」であると考えているところからも、両者の倫理観は同様であると思われる。このような倫理観を有するルソーの教育論の目的は、有徳な社会的自然人であり、徳育はロックの「教育論」の場合と同じくルソーにあっても「エミール」の中心となるものであった。また、このような究極目的である徳性涵養のために鍛練主義を教育の重要な柱と考えている点もロックと同様である。そこでルソーは鍛練主義の一つの方法として、ロックと同様な医者や芸術に対する批判として、「医者は身体の病気をなおしても気力を殺してしまう。かりに医者が死骸を歩かせたとしてもそれでいったいどうなるというのか⁵⁷⁾」と述べている。このように病気に対しても、また「苦痛に耐えることは子どもが学ばなければならない第一の事柄であり、彼が何ものにもまして知っておく必要のある事柄⁵⁸⁾」でなければならない。なぜなら、ルソーは教育にあたって「自然をよくみるがよい。そして自然があなた方に示す道を進むがよい。自然は絶えず子どもの体質を鍛える⁵⁹⁾」ものであると考えているからである。このことは“自然の法則”でもあったが、このようにルソーの鍛練主義の体育思想は、教育上単に身体健康や強壮のみならず、忍耐・節制・勇気などの徳育的側面を同時に陶冶するものであり、その点で徳育そのものでもあった。このようなルソーの考え方は、先にも述べたようにロックと同様なものである。しかしこの場合、われわれが銘記すべきことは、ルソーが単なる鍛練主義を表明しているのではなく、“自然の法則”や早期からの習慣形成などを駆使する教育的方法を鍛練主義に加味していることである。特に、ロックが主張した“自然の法則”(the Principle of Nature)こそ、ルソーの教育思想の根本理念である“自然の教育”(l'éducation nature)の基調となる“自然の法則”(la règle de nature)であると理解するとき、ルソーはロックの「教育論」からすぐれて重要な教育原理、すなわち、自然主義教育思想を継承し、ルソー独自の“自然の教育”を明快に彼の「エミール」の中で展開することが可能となったといえよう。実にこの点にこそ、ロックがルソーに与えた最大の影響力であると考えられるのである。

われわれは、ロックの「教育論」にみられる体育思想を取りあげて考察し、ルソーの体育思想との比較を通し、その結果両者の体育思想の類似性やロックの影響力の明らかなことは本小論でも十分理解されるところである。しかしここで、ロックにはあまりにもブルジョワ的紳士「教育論」の他に、彼が貿易植民地委員会の委員をしていた時に、その委員会へ提出するためにロックが中心となって起草した「貧民子弟のための労働学校案」(Plan for Working School for Poor Children, 1697)がある⁶⁰⁾。これは貿易促進のために産業ブルジョワジーの立場から、幼児労働を実施させ、副次的に子どもに初歩の読み書きを教えこむという主旨のものであった。このような貧民教育論に比して、すぐれた紳士「教育論」にみられる教育思想との間には、特にロックが「君主や貴族や一般の紳士の子弟とでは教育が異ならないなければならない⁶¹⁾」と述べているように、判然たる溝があり、最下層の一般大衆にはすぐれたロックの教育思想は応用されなかった。このように階級性を

露骨に示し、両極に分離したロックの教育思想とルソーの「エミール」や「ポーランド統治論」(Considerations sur le gouvernement de Pologne, 1772)にみられる教育思想や体育思想を比較する時、その対照性は鮮やかに浮き彫りにされるのである。このように、ロックの体育思想はルソーに重大な影響を与えながらも、それは方法論的側面にとどまり、本質において明らかに異なるものであったといわざるをえない。

以上要するに、ルソーは、ロックの体育思想から身体観や鍛練主義体育観を明らかに継承し、ここからルソーのすぐれた特色を有する自然主義体育思想の醸成が可能となったのであると考えることができる。しかし、ルソーの国民体育思想の著しい革新性と比較すると、ロックの紳士「教育論」にみられるブルジョワ体育思想は、すぐれた体育思想史的意義を有しながらも、スミス(Adam Smith)やオーエン(Robert Owen)などの出現を俟って、19世紀の公教育思想の形成過程のなかで国民一般へと滲透するものとして歴史的課題を有するものであったといえるであろう。

む す び

われわれはこれまで、ロックの「教育論」にみられる彼の体育思想について考察しながら、以下のように整理してきた。最初に、ロックの体育論は心身を一体として把握し、鍛練主義教育思想を介して「教育論」のなかに基底として明快に位置づけられていたことを理解した。さらに、身体観や鍛練主義体育観やレクレーション論の三つに分けてロックの体育思想を具体的に述べた。その結果ロックの体育論は健康養生論を中心とした前近代的な体育思想であることを理解した。しかし、そこにみられるロックの体育思想は、子どもの教育にあたって心身の調和的発達を図ることをねらいとした、全面発達を求める教育的身体観を基礎としていること、“自然の法則”や漸次的な習慣形成を教育上尊重しながら子どもを鍛えることを目的とする鍛練主義体育観を有していること、さらに身体活動を中心とするユニークで近代的なレクレーション論を内包していることなどの点に斬新な主張がみられた。これらの主張はロックの前近代的な健康養生論を克服して、今日的意味を有するものであった。最後に、このような諸特徴を有するロックの体育思想を近代体育思想の史的流れの中におき、特に近代体育の始祖グーツムーツに影響を与えたルソーの「エミール」にみられる体育思想と若干の比較を試みた。その結果ルソーの体育思想には、ロックの体育思想の影響として、身体観や鍛練主義体育観、特にこの二つの底に流れている自然主義体育思想などの点で明らかにロックの重大な影響がみられた。また、これらを発展的に継承したルソーは、ロックの影響下に彼独自の自然主義体育思想を形成したと考えることができるのである。このように考える時、ロックの「教育論」にみられるすぐれた体育思想は、近代体育思想の系譜上に、一大エポックを画するとともに、少なからぬ影響をルソーに与えているといえよう。同時に、今日のわれわれの複雑な状況下にある体育の諸問題を考える場合、ロックのすぐれた斬新な体育思想は重要な示唆を与える源泉となろう。

注

- 1) John Locke, Some thoughts concerning Education, 114 (James L. Axtell, The Educational Writings of John Locke 所収, Cambridge), 1968
- 2) Ibid., 325
- 3) Ibid., 11
- 4) Ibid., 198—199

- 5) *ibid.*, 240
- 6) Axtell 版による。梅根悟「西洋教育思想史」I, 誠文堂新光社, 270 参照
- 7) Locke, *op. cit.*, 112
- 8) *ibid.*, 241
- 9) *ibid.*, 253
- 10) *ibid.*, 138
- 11) *ibid.*, 224
- 12) *ibid.*, 220
- 13) Paul Monroe, *A text Book in the History of Education*, 512, AMS press New York, Reprint 1970
- 14) Locke, *op. cit.*, 139
- 15) *ibid.*, 268
- 16) *ibid.*, 208
- 17), 18) *ibid.*, 148
- 19) *ibid.*, 116
- 20) *ibid.*, 115—116
- 21) *ibid.*, 210
- 22) *ibid.*, 114
- 23), 24) *ibid.*, 115
- 25) Van Dalen, Bnnett, *A World History of Physical Education*, 180, Prentice Hall, second edition, 1971
- 26) Locke, *op. cit.*, 128
- 27) *ibid.*, 136
- 28) *ibid.*, 115—116
- 29) *ibid.*, 116
- 30), 31) *ibid.*, 121
- 32) *ibid.*, 129
- 33), 34) *ibid.*, 133
- 35) *ibid.*, 135
- 36) *ibid.*, 136—137
- 37) *ibid.*, 123
- 38) *ibid.*, 117
- 39) *ibid.*, 138
- 40) *ibid.*, 132
- 41) *ibid.*, 312—313
- 42) *ibid.*, 311
- 43) *ibid.*, 317
- 44) *ibid.*, 315
- 45) *ibid.*, 317
- 46) E. W. Nixon, F. W. Cozens, *An Introduction to Physical Education*, 大谷武一訳, 体育序説, 150, 不味堂 (1963)
- 47) モンテーニュ, 「エッセー」(原二郎訳, 岩波文庫四) 73—74, (1968)
- 48) 同上書, 岩波文庫一, 312

坂入：John LOCKE の体育思想について

- 49) 拙稿「ルソーの体育思想について」東京学芸大学大学院教育学研究集録第4号，1973年12月参照
- 50) ルソー，「エミール」Ⅰ（長尾十三二他訳，明治図書，世界教育学選集）151，（1971）
- 51) 同上書，170
- 52) 同上書，183
- 53) 同上書，185，括弧内筆者
- 54) 同上書，29
- 55) 同上書，Ⅲ，183
- 56) 同上書，Ⅰ，193
- 57) 同上書，51
- 58) 同上書，92—93
- 59) 同上書，38
- 60) 梅根悟，上掲書，287—297，浜林正夫「ジョン・ロックの教育論」（「教育」所収，国土社）132—139，1962・9 参照
- 61) Locke, op. cit., 325